



「主の復活を覚える季節に」

評議員 徳 野 昌 博
(日本福音ルーテル教会牧師)

この原稿を依頼され、着手したのは3月20日。母照代の命日です。亡くなったのは一年前。その日までの約十二年間、母は「るうてるホーム」を「終の棲家」として生活しました。百年の人生最後の日々を「るうてる」で過ごすことができ、感謝しています。

「るうてるホーム」には本当にお世話になりました。母が入所したのは、2009年の秋9月でした。その時私は、自身の仕事の関係で東京にいました。そんな事情で、その頃は関西に行ったついでに、たまに足を延ばして、忍ヶ丘駅で降りて、岡山東にあったホームまでの坂道を歩いて母を訪ねていました。「元気にしてるかなあ」、「何を話そうかなあ」と思い巡らしつつ…。

しかし会うと、母は、「無理しなくていいよ」、「忙しいんでしょ。帰っていいよ」と言って、私の訪問に気を遣っている様子でした。もとより、こちらもとりにて話すこともなく、話が弾むということはありませんでした。でも、東京生まれの母が語る、娘時代の東京の話は興味深くおもしろかったです。読書が好きで、なかなかの物知りでした。

2017年の夏には、「特養」に移り、体

も不自由になり、ベッドに横たわっていることが多くなりました。視力も衰え、読書もままならなくなり、さびしかったことでしょう。二人の間におしゃべりはなくとも、母は満ち足りた思いでいたように思います。それが私には何よりうれしいことでした。

そんな愛する母が亡くなったのは、イエス様の十字架の苦しみと死に思いをいたす四旬節最中の土曜日でした。週が明けた22日の月曜日に、ホームの礼拝堂で、大柴譲治牧師司式のもと、葬儀を営みました。母を主なる神様のみ手におゆだねすることができ、「これで大丈夫」と悲しみの中にあっても、私たち遺された者は安堵しました。

イエス様の生涯、その生き方は必ずしも全ての人から歓迎されたわけではありません。敵対する者も当然いて、その行きつく果てが十字架刑でした。しかし、イエス様は、人がどう言おうが、邪魔をしようが、父なる神様から与えられた使命に対して忠実でした。苦しんでいる人々、悲しんでいる人々と共に生きることによって、イエス様は、私たち一人ひとりを救うという、父なる神様から託された使命を貫き、生き抜いてくださいました。

その十字架のイエス様のゆえに、私は安

堵したのです。母はただただ、「神様の憐れみ」のうちに生かされて生き、そして死にました。そこにこそ、彼女の復活があると思っています。彼女は、イエス様の生き方、あり方のすべてを、聖書を通して思い巡らしながら、一人ひとりが小さなキリストとなって生かされて、生きていることを感謝のうちに確信していたことでしょう。

私たちの罪の赦しのために十字架の苦しみと死を引き受けてくださり、そして復活

して今も生きておられるイエス様が、私たち一人ひとりを常に見守り求め、出会ってくださり、共に歩んでくださいます。主の復活を心から喜び、感謝します。



「るうてるホームに入居して」

水野登美子

コロナや他の株が次々に発症する中、私は、昨年9月にるうてるホームに入居させて頂きました。こんなことが起きるとは神様以外、誰もご存じないことでした。

豊中に嫁にきて63年、子育てと英語教育に心魂を傾ける日々でした。本当によく働きました。教会や地域のボランティア活動、ガールスカウト活動、そして古い岡山東のるうてるホームへどれだけ足を運んだことでしょう。家事の得意な姑やいつも私をサポートしてくれる夫に支えられて。

しかしその頃夫は認知症を発症し、治療が必要となりました。45年前に建てた古い大きな家に一人で生活することは不可能となりました。それでるうてるホームへ入居させていただくことを決心しました。9月に入居して10月には発病して一か月の入院生活を余儀なくされました。その間どれだけ多くの方々に支えられたことでしょう。全国や外国にいらっしゃる多くの信仰の友に祈り導かれ

ました。それがなかったら今の私は存在しなかったと思います。心から深く感謝いたします。皆様のお祈りやお手紙によって支えられ励まされました。この感謝は筆舌には表せません。

退院後はこのホームの方々に支えられ、旧知の友のように親身になってお世話していただきました。ホームの生活については「衣、食、足りて礼節を知る」と言われますが、本当に恵まれた環境で何不自由なく過ごさせて頂いています。友人に恵まれ、日々の信仰生活をサポートしていただき満足しています。日曜日には2、3回の礼拝を守ることもあります。私の娘に「ママは今に聖女になるわ」と言われています。

一方世の中はコロナが少し下火になったように思われますが、他方世界に目を向けますと目を覆いたくなります。ロシアとウクライナの愚かな戦争によって、多くの人が傷つき、この寒空の中、安全な地を求めて移動してい

る姿には心が痛みます。話し合いによって
相手の立場を尊重し共生の道を歩んでくださ

ることを切望する今日この頃です



「コロナ禍の暮らしにも小さな喜びや楽しみを見つけて」

軽費事業部 中村 みどり

こんなに長い自粛生活になろうとは入居者の皆様も全く思いもよらなかったことでしょう。2年間の不自由な暮らしにもめげず、手洗い、マスクと日々気を付けながら外出や面会制限にも耐えてくださいました。

3月21日からようやくまん延防止法重点措置の解除となりました。会話することは久しぶりと喜び合っておられるご家族のお姿、お顔に笑顔があふれる場面に私も同じ気持ちになっていました。特養におられる奥様とお会いしたくて、毎日のように「いつ会えるのですか、手を握ってあげたいです」と懇願されるご主人様、オンライン面接を利用していたき何とかお気持ちを和らぐことができました。入院しておられるご主人に会いたいですと寂しさを訴える奥様もおられます。

ケアハウスの方々の生活を変えてしまったことは本当に悔しいことですが、そのような日々の中にもささやかな楽しみ、小さな喜びを見つける方々がおられます。体調の変化によって、つらい気持ちの方がおられると慰めてくださる方、手作りおやつで心もお腹も癒してくださる温かいお仲間、日々の生活に潤

いを作り出す方々に喜びがあふれていて、その場所にいつまでも居たい気持ちになります。

花を愛で、小さな花壇の植え替えをする方、ユニットのテーブルに花を飾り、環境を美しく整える方、食事の準備を楽しむ方、それぞれにできることを支えあって小さな喜びを分かち合う方々がおられます。

その方々の一日は祈りで始まります。朝食後はユニットのテーブルに聖書と讃美歌と聖書日課を置き、司会者が15分の時間を担当してくださり祈りを終えるとそれぞれの趣味を楽しんでおられます。時には頼まれた手仕事に皆様がご一緒に取り組んでおられ何とも楽しそうです。

長い年月に手仕事や、趣味を続けてこられた方々の匠的な技に感動します。

コロナ禍であることを忘れてしまうような素敵な時間を作り出す方々の、粹なお姿に尊敬のまなざしで見つめるわたくしがいます。多くの災害や戦争、悲惨な状況の時代を乗り越えてこられた方々だからこその暮らしなのでしょう。コロナに負けない精神力をわたくしも身に着けていきたいと思いつつ。

2022年4月1日より

るうてるホームの短期入所事業の名称が「ショートステイるうてる」に変更されます！
また、**通所型サービスC事業(少し生活に不安がある方がちょっとお元気になるサービス)**を土曜日に開設します！ 詳しくは担当者までお問い合わせください。

後援会ご献金感謝報告

2021年12月1日から2022年3月25日までの献金総合計は、821,500円ございました。多額のご献金に感謝申し上げます。

今後とも皆様のご支援をどうぞよろしくお願い申し上げます。

編 集 後 記

ホームの桜は一足先に暖くなった頃からつぼみが膨らみ始め、この後援会ニュースがお手元に届くころには、もう満開になっていると思います。ホームでは相変わらずコロナ禍の影響を受けてはいますが、入居されている方々が誰ひとり感染することなく、今日に至っています。神様の御守りに感謝しつつ、こうして季節が変わりなく紡がれ、また平穏な毎日が続けられるよう、祈りたいと思います。（石）

発行所 575-0002 大阪府四條畷市岡山五丁目 19 番 20 号

TEL 072-878-9371 FAX 072-878-5293

メーリングリスト jimushitu@ruuteruhome.or.jp

振込口座番号 00910-1-41037 加入者名 社会福祉法人るうてるホーム

発行責任者 後援会長 徳野昌博